



## p4cみやぎ 10月研修会報告

### オンラインによる p4c みやぎ 10月研修会

10月22日(金)に、オンラインによるp4c みやぎ 10月研修会を行いました。今回は、研修1で、宮城教育大学特任教授の庄子修先生から、「白石市小中学校におけるp4c アンケート調査結果について」お話をいただきました。

その後の研修2では、二つのグループに分かれ、「セーフティのある職場はどうやってつくるのか。」という問いで、p4cを行いました。

#### 【研修1】

報告：「白石市小中学校におけるp4c アンケート調査結果について」

講師：宮城教育大学 庄子 修 特任教授

○経験回数について

- ・学校によるばらつきはあるが、小学校が多く、中学校は、小学校ほど多くはない。
- ・小学校での実践は、担任が多く、中学校では担任以外も行っている。

○良さを感じる割合について

- ・小学校の生徒は88%が良さを感じているが、中学校の生徒は66%であり、昨年より8ポイント下がっている。

○経験回数と良さを感じる割合との相関関係について

- ・中学校では、回数が多いほど良さを感じている生徒の割合が、若干減少している。
- ・教員の教職経験年数と良さを感じる割合には、相関関係はない。

○教師の変化について

- ・子どもの問いを大切にするようになったということについては、昨年より伸びている。

○活用する場面について

- ・道徳、学活が多く、他教科は少ない。

○自由記述から

・良さを感じていない小学生の記述には、セーフティが守られていない、強制的に言われるなどがあったが、回数は増えることを望んでいる。また、教員は、時間確保やねらいから外れること、セーフティを守らせることに難しさを感じているという記述があった。

・中学校で良さを感じない生徒の記述はでは、もっと深く、回数を増やしたいなどの質の高さを求めるものが多かった。また、教員は、進め方についての不安などの記述が見られた。

○今後に向けて

・新学習指導要領の主旨を、再度理解すること、研修の必要性など。

#### 【研修2】

問い：「セーフティのある職場をどうやってつくるのか。」

〈グループA〉

- ・職員の中に、潤滑油の役割をする人が必要。
- ・勤務時間外のところでのコミュニケーションも大切。

- ・教師自身がhappyであること。笑顔が大事。
- ・学年の枠を外して、プラスになる話題を共有できるような工夫も必要。

〈グループB〉

- ・セーフティは、それぞれ感じ取り方が違う。自分にとってはセーフティでも他の人にとっては違う場合も。意見の違いはあっていいが、意見を聞こうとしないのは、セーフティではない。

- ・役割と責任をバランス良く持つことが大事。
- ・そこにいて、心地よいことが大切。
- ・セーフティがないと思ったら、自らコミュニケーションをとり、心の距離を縮めるようにする。

HP (<http://p4c.miyakyo-u.ac.jp/>)

Mail ([p4c@adm.miyakyo-u.ac.jp](mailto:p4c@adm.miyakyo-u.ac.jp))

## 白石調査の結果について

2020.10.22. 庄子メモ

### 1 経験回数と「良さ」の実感（小中併記のグラフから）

- ① バラつきはあるが、小学校での実践が多い。
- ② 小学生は 80%程度、中学生は 66%が「良さ」を感じている。小学生は前回同様だが、中学生は 8 ポイント減少。「良さ」を感じない理由を自由記述から探る必要がある。
- ③ 経験回数が多いほど「良さ」を実感。一方、回数が多い中で、「良さの実感」の減少傾向が見られる。行き詰まり感を自由記述から探ってみる必要がある。
- ④ 教員の経験回数のグラフから、担任中心に実践
- ⑤ 教員の「良さの実感」は減少。特に中学校教員の4割近くは良さを感じていない。数値的には子供と同じ傾向にあるが理由は異なり、自由記述から探る必要がある。
- ⑥ 教員の「良さの実感」は、教職経験年数とは無関係

### 2 良さを感じない理由など（○→△及び△→△を選択した子供と教員の自由記述から）

- ① 小学生の「良さを感じない理由」は、恥ずかしい、話合いが苦手、は一定程度当然だが、セーフティが守られていない、ふざける人がいるなど、ルールに関するものあり。
- ② 小学生の「こうしたいという希望」は、「みんな静かになればいい」、「強制的に言わせられている感がある」など、ルールの徹底を訴える内容が目につく。
- ③ 教員は、進め方や時間確保の難しさ、ねらいとのズレ等を挙げている。
- ④ 中学生の「良さを感じない理由」は、ルールが守られていない、ふざけている、無理やり言わされているなど、ルールに関するものの他に、話題が面白くない、飽きてきたなど、行き詰まり感を示す記載も見られる。
- ⑤ 中学生の「こうしたい希望」は、発言の強制はやめて、などの他、回数を増やしてが目立つ。さらにはテーマへの要求もある。「生徒中心で」など教師の関わり方も。
- ⑥ 中学校の教員は、問いの立て方など進め方に関する不安、セーフティ確保での苦慮、時間確保、他の手法がある、といった内容。

### 3 他にグラフから分かること

- ① 「問いを大切にできるようになった」など、新学習指導要領で大切な、教員の意識変革は進んでいる。
- ② 活用場面は道徳や学活が多く、教科での活用は今後の課題である。

### 4 アカデミーから

- ① 進め方の確認とルールの徹底を。場合によってはアカデミーによる出前研修も。
- ② 新学指導要領の趣旨（別紙参照）と、今月出された「令和の日本型学校教育」の構築を目指した中教審の中間まとめについて
- ③ 取り入れ方  
ア、45分、50分全てでなくてよい。  
イ、エアボールなどの工夫。「教具を消毒するよりも、前後の手洗いを」。
- ④ 先生方は、「本時のねらいの呪縛」からの脱却を